

# 糖尿病・内分泌疾患ってどんな病気？



内分泌・糖尿病内科代表部長  
荻原 貴之

## 糖尿病、内分泌疾患とは

現在、糖尿病の患者数の増加は世界的な問題となっています。本邦も例外ではなく、2016年の国民健康栄養調査では糖尿病が強く疑われる人は約1000万人、糖尿病の可能性を否定できない人は約1000万人とおおよそ2000万人、即ち国民の6人に1人が耐糖能障害を有すると推計されています。

糖尿病の最大の問題は血糖値が高いことだけではなく、高血糖が持続することにより惹起される合併症であり、それに伴ういわゆる健康寿命の短縮、さらにその治療に要する医療費を含めた経済的損失です。糖尿病の合併症は、古くからいわれている糖尿病網膜症、腎症、神経障害といった比較的細い動脈が障害される細小血管障害のほか、虚血性心疾患など比較的太い動脈が障害される大血管障害がありますが、最近では認知症や骨粗鬆症なども糖尿病に合併する危険性が高いことが明らかになり、現在の糖尿病診療ではこのような疾患も視野に入れた治療が求められるようになってきました。

一方、身体の恒常性を維持する物質の一つにホルモンがあり、その異常によって発症する病気が内分泌疾患です。代表的なものとして甲状腺疾患、副腎疾患、副甲状腺疾患などがあり、症状としても疲れやすい、元気がない、いらいらする、体重が減ってきた、血圧が高いといったつかみどころのないようなものが多いですが、治療により症状が劇的に改善することが多いです。

## 当院における糖尿病並びに内分泌疾患の診療

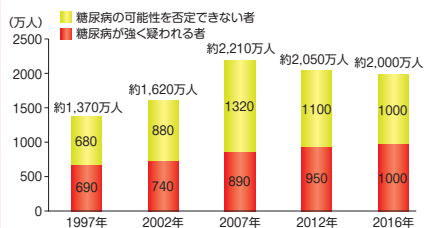
当院内分泌・糖尿病内科では荻原と非常勤医師として青木智之医師が診療にあたっています。

現在およそ1100名の方が当科外来に定期的に受診されており、そのおよそ8割の方が糖尿病に罹患された方です。糖尿病診療では、経口血糖降下薬による治療だけでなく、外来でのインスリン療法の導入も積極的に行っています。また、ただ単に血糖値のコントロールを行うだけでなく、定期的な栄養指導や服薬指導、透析予防指導、フットケアも行っております。当科では病診連携にも力を入れており、後に述べます教育入院に引き続く連携パスを用いた病診連携で診療を行っている方がおよそ30名おり、連携パスを用いない形での病診連携で診療を行っている方も多数おります。内分泌疾患については診断のため、なるべく多くの検査を外来で行っており、糖尿病診療と同様に入院して行う治療、検査は最小限に留めるなどの工夫をしています。

## 糖尿病教育入院

糖尿病は教育の病気であると言われており、糖尿病診療において患者教育は重要な位置を占めています。当院では教育入院にも力を入れており、3日間あるいは1週間の入院期間の内に医師だけでなく看護師、栄養士、薬剤師、臨床検査技師、理学療法士といった専門の職員から糖尿病治療に関する講義を受けることができます。外来ではどうしても診療時間が短くなりがちですが、教育入院の機会を利用して糖尿病治療に関する知識を習得することにより、外来での治療内容についてもより深く理解していただけるものと考えております。

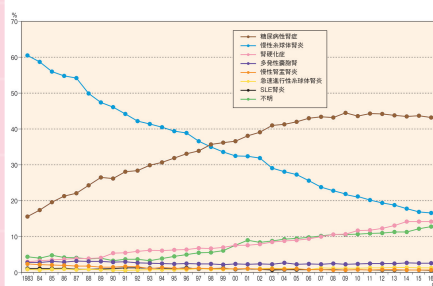
日本における糖尿病人口の推移



糖尿病の可能性を否定できない者：HbA1c (NGSP) 値が6.0%以上、6.5%未満 (2007年まではHbA1c (JDS) 値が6.6%以上、6.1%未満) の者。  
糖尿病が強く疑われる者：HbA1c (NGSP) 値が6.5%以上 (2007年まではHbA1c (JDS) 値が6.1%以上)、または、これまでに医療機関や健診で糖尿病とされたことがあり、「糖尿病の治療を受けている」と回答した者。  
※1997年、2002年、2007年はJDS値、2012年、2016年はNGSP値を用いて判定。

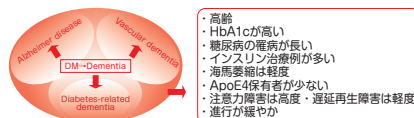
2016年国民健康・栄養調査 (厚生労働省)

透析導入の主要原因疾患の推移



日本透析医学会統計調査委員会「わが国の慢性透析療法の現状」

糖尿病性認知症



糖尿病性認知症の臨床診断ガイドライン

- 2型糖尿病：コントロールは不良のことが多い。
- 認知症：記憶障害より注意・集中力の障害が目立ち、進行はやや緩徐である。
- CT/MRI：血管性病変や白質病変は軽微で、大脳萎縮はみられるが海馬領域の萎縮は軽微である。
- SPECT/PET：大脳後方連合野の血流/代謝の低下を認めず、アミロイドPETは陰性である。
- 脳脊髄液：リン/酸化タウ蛋白の上昇やAβ42の低下はみられない。
- アポリポ蛋白E (ApoE) 遺伝子多型：ApoE4キャリアリアは少ない。(せいぜい30%以下)
- 除外基準：甲状腺機能低下症、ビタミンB1・B12低下症、アルコール中毒、頭部外傷、血管性認知症、その他の変形型認知症

日本内科学会雑誌104巻9号